特集号のご案内
理解しやすく行動しやすい健康医療情報の研究と実践：リーダビリティと PEMAT
Research and practice of health care information that is easy to understand and act upon: readability and PEMAT

奥原剛 [1)]
Tsuyoshi Okuhara[1)]

1)東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野
1)Department of Health Communication, School of Public Health, The University of Tokyo

本特集では、第 3 回日本ヘルスリテラシー学会学術集会のシンポジウム「理解しやすく行動しやすい健康医療情報の研究と実践：リーダビリティと PEMAT」での 3 つの講演内容をもとに、各講演の演者による総説を掲載します。米国の *Healthy People 2030* はヘルスリテラシーの定義を更新し、「個人のヘルスリテラシー」と「組織のヘルスリテラシー」の両方に言及しています。新たに明示された組織のヘルスリテラシーは、すべての人々が公平に、健康に関する情報とサービスを見つけ、理解し、活用できるように、医療・公衆衛生の側が組織的に取り組む重要性を示しています。つまり、市民・患者に向けて、理解しやすく行動しやすい健康医療情報を作成し発信することの重要性が、改めて明示されたといえます。この背景をふまえ、本シンポジウムでは、組織のヘルスリテラシーの要素のひとつである「情報提供」を対象にしました。

1 つめの総説では、私（奥原）が、健康医療情報のリーダビリティ（可読性）に関する研究を紹介し、文章の読みやすさを切り口に、理解しやすく行動しやすい健康医療情報の作成を考えました。2 つ目の総説では、日本語学の視点から健康医療情報の理解しやすさの研究・実践に取り組まれてきた羽山慎亮先生に、理解しやすい健康医療情報のガイドラインや事例を解説いただきました。3 つ目の総説では、古川恵美先生に、健康医療情報の理解しやすさと行動しやすさの評価ツールである日本版 PEMAT を活用した、健康医療情報の評価と改善について解説いただきました。

羽山先生が総説に記されているように、米国などと比較して、日本には健康医療情報の理解しやすさや行動しやすさを高めるためのガイドラインや取り組み事例が乏しいのが現状です。また、古川恵美先生が開発した PEMAT 日本版は、健康医療情報の理解しやすさと行動しやすさを量的に評価できる日本で初めての尺度です。これまでの日本では、健康医療情報の理解しやすさと行動しやすさの研究・実践に携わる人材も乏しかったといえるでしょう。これからの国内外の健康医療情報の理解しやすさと行動しやすさの研究・実践を担っていく羽山先生、古川先生の若いお二人に、本シンポジウムで講演いただき、総説を寄稿いただけたことは、日本のこの分野の研究・実践の未来の光明であると思います。どうか読者の皆様も、これからの日本の健康医療情報の理解しやすさと行動しやすさの研究・実践にご一緒いただけますと幸いです。